

切子、日本のカットガラスの成立とその父  
エマニュエル・ホープトマンを辿って

サリー・ハイデン

# 切子、日本のカットグラスの成立とその父 エマニュエル・ホープトマンを辿って

サリー・ヘイデン

## 概要

1881年(明治十四年)の春のある日、若きボヘミアガラス職人はついに日本の地へ降り立ちました。英国から六週間にもおよぶ長い航海だっただけに、その感激はひとしおだったことでしょう。エングレーヴィングだけではなく、カッティングの技法にも長けたエマニュエル・ホープトマンは、この地に一年余り滞在することとなります。わずかな期間にもかかわらず、ホープトマンの指導は今日の日本におけるカットグラス産業の礎を築きました。彼は近代化政策に乗り出した明治の維新政府が英国から招聘した四人の技師の一人で、西洋のさまざまなガラス製造を伝達するためにやってきました。英国やアイルランド、ヨーロッパの品を模倣したガラス装飾品は19世紀初頭から日本に登場していたものの、ホープトマンは日本のカットグラス界の父と考えられています。これはそのホープトマンの生涯、そして日本のカットグラスである切子を遡るストーリーです。

1881年(明治十四年)の春のある日、若きボヘミアガラス職人はついに日本の地へ降り立ちました。英国から六週間にもおよぶ長い航海だっただけに、その感激はひとしおだったことでしょう。エングレーヴィングだけではなく、カッティングの技法にも長けたエマニュエル・ホープトマン<sup>1</sup>は、この地に一年余り滞在することとなります。わずかな期間にもかかわらず、ホープトマンの指導は今日の日本におけるカットグラス産業の礎を築きました。彼は近代化政策に乗り出した明治の維新政府が英国から招聘したガラス製造に関わるメンバーの一人でした。その職務は、近代的な洋式ガラスの製造技術を日本に導入するため、東京のガラス製造所で助言や技術の支援、指導にあたるものでした。140年経った今日では、ホープトマンは日本のカットグラス界の父と考えられています。これはそのホープトマンの生涯、そして日本のカットグラスである切子を遡るストーリーです。

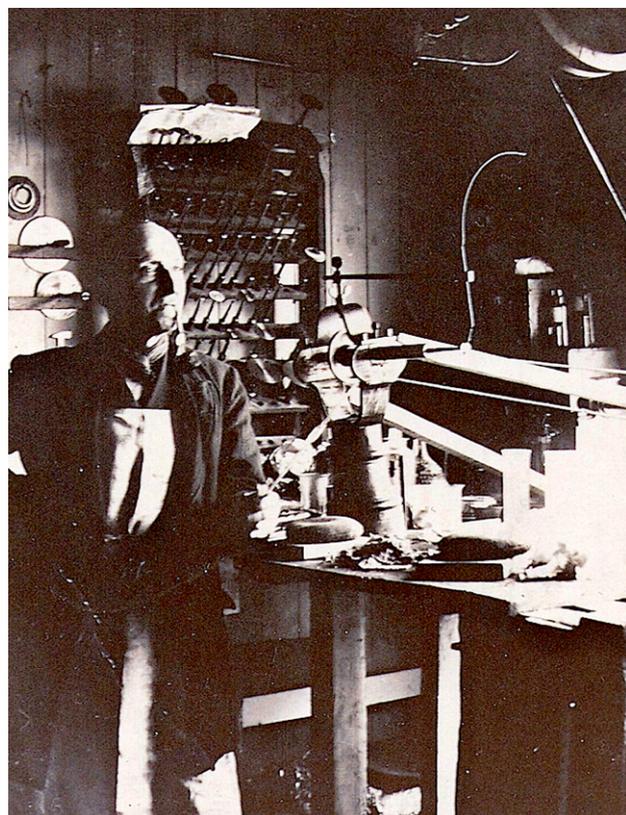


図1: イングランドのガラス・エングレーヴィング工房にいるエマニュエル・ホープトマン(1848年~1924年)。1904年、ホープトマンご家族のご厚意により転載。

ホープトマンが初めて品川のガラス工場を目にしたのは、横浜駅から汽車に乗り、新橋停車場手前の品川停車場で降りるまでの汽車の窓からだったと思われます。幼い頃からガラス製作が身近な環境で育ったホープトマンにとって、建物自体には大した驚きもなかったでしょうが、客車から見えた製造所の光景には目を見張るものがあったはずで。というのも、開業してまもない日本初の鉄道沿いに堂々と建築されたその製造所は、1873年にたった一基の窯で創業されて以来、急速な成長を遂げていたからです。

板ガラス製造を見込み、当初民間で創業された興業社は、1876年(明治九年)に官営化されて「品川工作分局」となり、まもなく「品川硝子製造所」と改称されました。この製造所にはすでに三人の技師が英国から訪れていました。ホープトマンと同じく、この三人も日本の職人らに技術指導するため、期限付き契約で招聘されていました。1876年以降は、近代的な洋式ガラス製造に全対応できるように設備の拡充を指導していました。1881年までに製品(家庭用、理化学用、産業用、乗物照明器具用)に応じた技能訓練をほどこし、日本で初となる円筒法による板ガラスの製造も試みていました。何としても日本の国にガラス産業を生み出そう、と必死に取り組んでいた様子がうかがえます。

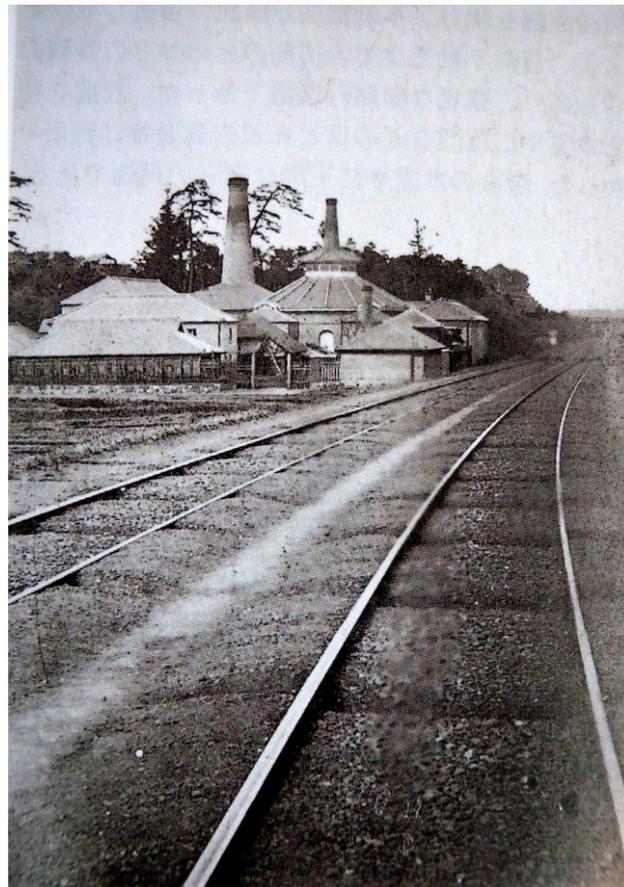


図2:日本初の鉄道沿いに建つ品川硝子製造所。1881年。写真集『日本の景色』から。小澤紅子氏のご厚意により転載。

## 日本のガラス産業革命

日本が近代化に向けて躍起になっていたのは、1850年代になって、200年以上にもわたる鎖国状態から開国せざるを得ない状況に陥ったことが背景にありました。鎖国の間、西洋社会では文化、産業技術、経済面で次々と改革が起こっていましたが、この流れは鎖国下の日本では生じず、ほぼ完全に取残されていました。しかし、外国との交易が厳しく制限される中であっても長崎の小さな港、出島からオランダとの貿易を中心に進歩した知識が少しずつ浸透してきました。ヨーロッパの高級品が江戸時代(1603年～1868年)に輸入されるようになり、その後「ギヤマン」と呼ばれるようになるさまざまな高級ガラス食器も含まれていました。ギヤマンの語源はダイヤモンドを意味するオランダ語diamantで、17世紀から18世紀にかけてオランダでガラス彫刻技術が卓越していたからではといわれています。江戸時代初期に日本にたどり着いたオランダのガラス製品は、先端にダイヤモンドが付いた道具を使い手作業で作られたものでした。<sup>2</sup> のちに、大きな回転盤(ホイール)を用いたカットガラスや小ぶりの銅回転盤で彫刻が施されたグラスが登場しました。あらゆるスタイルのギヤマンは富裕層でたいへんな人気を集め、特注の精巧な箱に包まれて何代も宝物として受け継がれていきました。

日本では古くから、ガラスというものはデリケートで貴重な素材のため、日常用いるには不向きとされてきました。そのため、ガラス製造は国内に点在する小さな工房に限られていました。江戸時代には洋式ガラスの模倣品も作られ出しますが、世間一般にガラス製品への関心は限られていたようです。手頃な値段でもなければ実用的でもなく、数多く入手できるわけでもなかったからです。それでも、国力と高度な産業技術を見せつけながら西洋諸国が日本に進出してくると、様相が変わってきます。蒸気機関、電信、銀行制度など、驚異的文明の数々に圧倒されて日本人は近代化へ向かわざるを得なくなり、旧来の手工業は西洋型の産業へと転換を余儀なくされていきます。日本のガラス工業は、まさに産業革命を経験したのです。

## 西洋に範を求めて

西洋の技術を頼りにした日本は、とりわけ英国に協力を求めます。日本初の洋式ガラス製造所を創業するにあたり、一翼を担ってくれるガラス製造技師を探していました。品川の用地が選ばれ、建築も開始されました。1874年には招聘される四人の英国人のうち、最初の一人、トーマス・ウォルトン(1833年～1897年)が到着します。ウォルトンは1874年から1878年の四年間、指導役と職工長を務めました。イライジャ・スキッドモア(1836年～1886年)は、1877年から1881年まで坩堝製造にあたり、ジェームズ・スピード(1834年～1908年)は1879年、職人たちの監督、および統括役に就任しています。<sup>3</sup> 約四年間、スピードは、製造所の事業プランが多角化するのに応じてさまざまな製品開発を支援しました。そして、最後に登場するのがエマニュエル・ホープトマンです。ホープトマンは自身がもっとも得意とする西洋式のエングレーヴィング技法とカッティング技法を日本の職人らに伝授しました。

ホープトマンが品川で指導を開始する1881年以前から、日本国内では西洋風のカットグラスや、摺り模様と呼ばれたガラス面への彫刻が始まっていました。大半の日本人には本物の舶来品ギヤマンは非常に高価だったので、ガラス職人たちはその模倣品を作ることに精を出していたのです。しかし西洋の技法とは異なり、ガラス面を削り出すのに棒状金具を前後に動かして摺る、完全な手彫りが行われていたようです。西洋では、少なくとも18世紀にはガラスのカッティングに回転器具を用いるのが一般化していたので、西洋の研究者は日本の技法に驚きを隠せません。しかし日本の研究者は、品川硝子製造所より前に回転器具が使用された可能性を否定しています。実際、日本の各地域で、それぞれ独特のスタイルでカッティングは発展していました。その主流である江戸切子は、1834年、東京でガラス職人加賀屋久兵衛により始められたのが起源と言われています。「切子」とはもともと立方体のそれぞれの角を切り落とした形を意味し、「切子」はカットグラスの和名です。

とはいっても、日本で初めてガラス装飾に西洋式技法が取り入れられたのは、まぎれもなくホープトマンが指導したこの場所でした。装飾に必要な器具や材料を西洋から輸入し、カッティング技法やホイール・エングレーヴィング(回転盤を使いガラスの表面を彫刻する)技法を直伝で指導したのです。さらに言うならば、品川で求められた基本方針は、分業、量産、大衆に向けた製品のラインナップといった、ガラスの産業化でした。品川は小さな工房の集まりではなく、れっきとした工場だったわけです。このように、ホープトマンが品川で行った指導は、現代のテーブルウェア産業、そして切子という特殊な工芸、このふたつの基盤を固める重要なものだったのです。

## ボヘミアのガラス装飾加工職人への道

1848年、ボヘミア地方の南境、森林地帯にあるストロブニッツ<sup>5</sup> という小さな村にエマニュエル・ホープトマンは生まれています。彼の父親は三人兄弟の末っ子で、ホープトマンの伯父たちは、皆、ヴォルフアースドルフ<sup>6</sup> で生まれました。ヴォルフアースドルフは、シュタインシェナウとハイダ<sup>7</sup> を中心とした森林地帯にあり、いかにも北ボヘミアといった森の中の村でした。このシュタインシェナウとハイダの森林は、ガラス製作にとっても、ガラス装飾を内職にしていた家庭にとっても欠かせない存在でした。ガラス装飾の副職を町工場から請け負い、農業の収入を補うことはこの地では珍しくなかったのです。19世紀後半、ボヘミア北部ではガラス装飾を行う工房や工場が2千軒以上あり、8千人が自宅で作業していたと推定されています。ホープトマンの伯父たち、イグナーツ・ホープトマン(1816年～1887年)やフランツ・ホープトマン(1818年～1893年)がどこで職人修行をしていたかは不明ですが、生まれた土地かその近辺で、ボヘミアガラスの業界に入ったと考えるのが妥当でしょう。

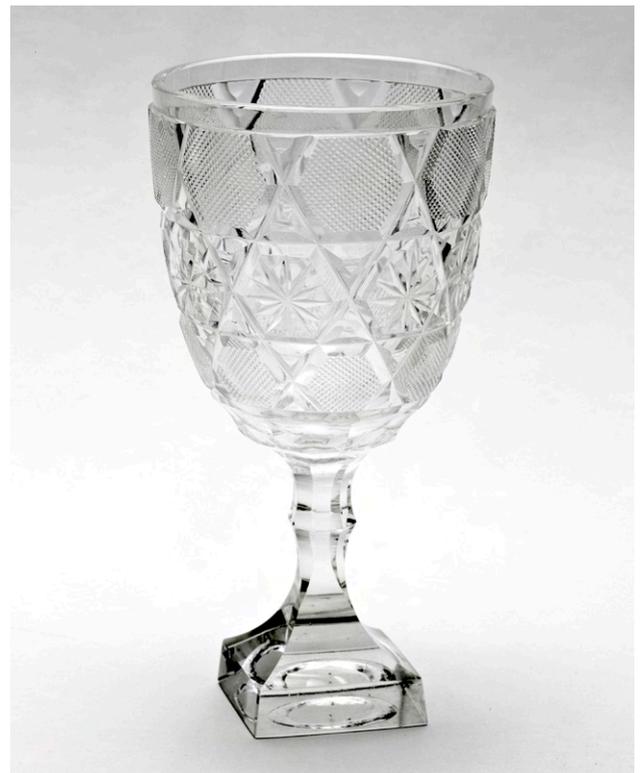


図3:江戸切子脚付ゴブレット。無色のリードガラス。作者不明。1860-1910年。高さ174mm。瓶口切子のご厚意により転載。

17世紀中頃、商人がボヘミアガラスをあちらこちらへ運び回った結果、ヨーロッパ中に広まり、北ボヘミアやその周辺のガラス製品は特に人気を集めていました。その宝石のようなクオリティー、光輝く鮮やかな色調に加えて、カッティング、エングレーヴィング、ギルディング(鍍金)、エナメル彩色…。高度で芸術的な技巧の数々が人々を惹きつけていました。ガラス装飾専門の大きな学校がいくつも誕生し、最終訓練として異国を巡歴するのが慣わしとなっていました。これを終えて初めて一人前の職人と見なされたのです。商人たちは長い伝統の中でヨーロッパ内外に張り巡らした輸出網を使って取引していましたが、彼ら自身もガラス装飾技術を身につけた者であることが多く、訪れた地の需要や流行に合わせて、その地でガラスに加飾を行うこともよくありました。時には、そのまま異国にとどまり、商人と職人を兼ねて商売を始め、その地の人々に手ほどきする者もいたようです。



図4:ボヘミアガラス広口器。1848年。クリアガラスに赤色の上塗り。底はカッティング技法で、『運命の三女神』が銅製の回転盤を用いたエングレーヴィング技法で彫り込まれている。ウィキペディア・コモンズより転載。

## エディンバラのボヘミアガラス職人たち

1840年頃、ホープトマンの伯父イグナーツ・ホープトマンがスコットランドのエディンバラに向けて故郷を離れたのも、先に述べた職人の慣習に則ったものでした。イグナーツはフランスや親族に支えられながらエディンバラに定住し、商売を始めます。英国ではちょうどボヘミアガラスが大流行となるところで、ホープトマン一族は多くの若いエングレーヴィング職人たちを故郷から迎え入れる架け橋になっていました。故郷にとどまるより外国へ出稼ぎに出たほうがはるかに賃金が魅力的だったのです。<sup>10</sup> 職人のなかには、エディンバラに残る者もいれば、優れたガラス工芸がすでに定着していた地、例えば、グラスゴー、ニューカッスル・アポン・タイン、スタウアブリッジ、ダブリン、さらにアメリカなどへ遠くへ移動する者もいました。優れた品質の工芸品の生産、交易の中心地であったロンドンもボヘミアガラス職人を惹きつけ、故郷から直接ここへ向かう職人たちもいました。18世紀から19世紀半ばにかけて、ボヘミアのガラス商人や工芸職人たちの姿は大陸のあらゆる主要都市で見かけることができました。<sup>11</sup>

高温で成型する過程を終えたガラスは、素地が冷たい状態で装飾加工されます。これをコールドワークと呼び、カッティング職人やエングレーヴィング職人は自宅や個人の工房など、工場から離れた場所でも作業することができました。未加工のガラスを購入して<sup>12</sup> それに装飾を加えて自ら販売することも、工場の下請けとして働くことも可能でした。産業革命が起こるまでは、加工に必要な設備はシンプルでさほど大きな動力も必要なかったため、安価で準備できました。旋盤も、手廻し、足踏み式、水車の動力で各工程に十分対応できました。しかし、いったん蒸気機関がカッティングに採用されると、すべてが変わってしまったのです。

## 西洋式カッティングとエングレーヴィング

19世紀初頭、ガラス装飾に蒸気機関を用いることに大きな可能性を見出したのは当時先駆けであったスコットランドのガラス工場だと言われています。18世紀終わりの科学技術の黎明期でさえ、たった一基の蒸気機関で、一つの工場の何台ものカッティング用旋盤を回す動力がまかなえたのです。導入には設備投資を要しましたが、1818年、将来を見据えた考えを持つガラス工場製造業者ウィリアム・フォードは、エディンバラのホーリールド宮殿近くにある自身の工場<sup>13</sup>に「機械動力とクリスタルカッティング作業のため」のおよそ5馬力の蒸気機関を借り入れました。まもなくここは「カッティングとエングレーヴィングの作業場と器具が唯一完備された」工場となりました。その様子は1834年の版画(図5)に描かれていたような光景だったと思われます。1836年頃には、彼の甥ジョン・フォードが工場をさらに近代化させています。工場は規模が大きく最新で、40人までのカッティング職人が一斉に作業することができました。

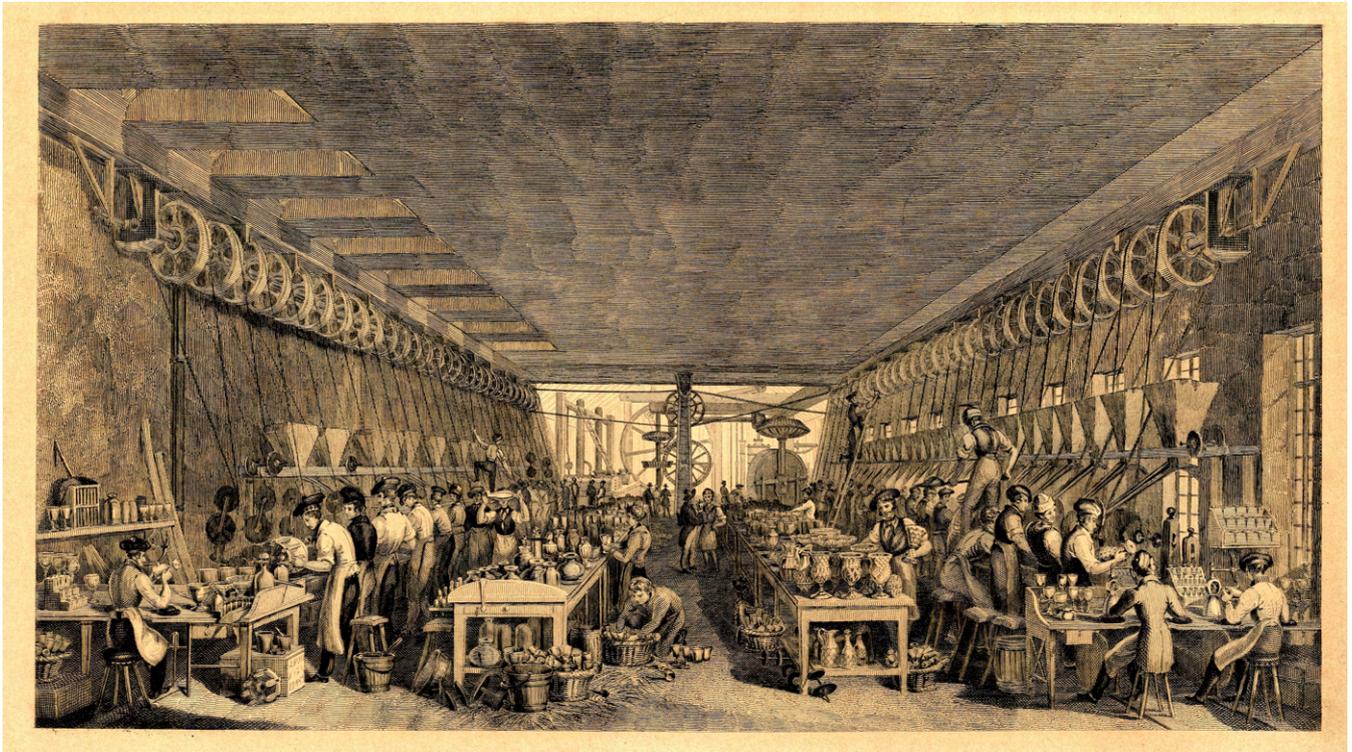


図5:1834年に描かれたエディンバラのホリールード・フリント・グラス・ワークスのガラス装飾工房。工場は1820年までに建設されたと思われる。部屋の奥に設置された一基の蒸気機関が工房の両端にある二台の回転軸に動力を送り、軸それぞれが20台の旋盤を回す。エディンバラ市博物館及びギャラリー、エディンバラ博物館、エディンバラ博物館の私有貸主のご厚意により転載。

この最新設備によりホリールード工場は、英国やアイルランドの工房のように美しく輝く見事なテーブルウェアや装飾ガラスを量産できたのです。後にリージェンシー様式として知られるこれらのガラス製品は大変な人気を博し、国内外ともによく売れました。先に言及したギヤマンのいくつかは、この時期の英国やアイルランドの工房から来たものでした。

ところでこのホリールード工場のエングレーヴィング職人はどこで作業をしていたのでしょうか。当時、ボヘミアンスタイルのガラスは重要な製品でしたが、この版画によると、工房内のホイール・エングレーヴィング職人は、カッティング職人10人に対してたった一人の割合で描かれています(図6)。実際のところ19世紀半ばまで、ホリールード工場のような大きなガラス工場では、エングレーヴィング加工を内職や下請けとして、ボヘミアガラス職人に外注していたのです。1848年にイグナーツ・ホープトマンにより設立されたホープトマン社は、このホリールードをはじめとする、他のガラス製造業者から発注されたエングレーヴィング加工を請け負ってかなりの量を受注し、約40年存続しました。

しかしながらホープトマン一族は、請負だけのエングレーヴィング職人ではありませんでした。ボヘミア職人のやり方に倣い、未加工のガラスを調達し、装飾をほどこし、販売していました。また小売店や個人客の要望に合わせて、どんなスタイルでも応じられるよう、カッティング、エングレーヴィング、ペインティング(絵付け)ができる環境を設けてありました。1853年から1854年、イグナーツ・ホープトマンは、エディンバラの商工人名録に、エングレーヴィング職人およびカット職人として登録されています。<sup>14</sup> 1881年、ホープトマン社にはエングレーヴィング加工室、ペイント工房の他、大きな蒸気エンジンを動力とする13台の旋盤装置を備えたカッティング加工室がありました。<sup>15</sup>

ボヘミアン・ホイール・エングレーヴィングは、美しい風景や自然、肖像画、古典的モチーフの表現にたけた、とてつもなく芸術的な技術をもつ職人がいることで有名でした。そのあまり、英国のボヘミアガラス職人はエングレーヴィング専門と見なされがちでしたが、彼らの大半は職や商売を守るため、エングレーヴィングもカッティングもこなして臨機応変に働いていたと思われます。イグナーツ・ホープトマンもまた然りで、ホイール・エングレーヴィングとカッティングの両方を身につけていました。

さて、エマニュエル・ホープトマンの生い立ちです。1860年代のある日、若きホープトマンは伯父たちに合流するため、スコットランドへ向かう船に乗ります。ボヘミアは上質なガラス製造地として、また交易の地として何世紀にもわたって世界中に名を馳せていました。ボヘミアのガラス職人たちは異国に移住し、住み着いた場所で求められた技術をその地の人々に伝授して暮らしていました。このボヘミアで生まれ育ったホープトマンの技法や素養は、ガラス職人の生活スタイルのなかで育まれた天性と言えるでしょう。

最初の移住先となったスコットランドでの様子ははっきりとはわかっていませんが、おそらく間違いなく、伯父たちの会社で働き出し、自分自身はカッティングをしなかったとしても、そこでカッティングの様子を目にしていたと考えられます。

その後1870年頃、グラスゴーでエングレーヴィングの職に就き、英国人女性と結婚します。そして家族を伴い南へ移住し、イングランドのニューカッスル・アポン・タインや近郊のゲーツヘッド<sup>16</sup> に居を構え、働きました。1881年の来日までに、ホープトマンはボヘミアと英国、両スタイルのガラス製造に精通し、移住による見聞も、ガラス装飾の知識もさまざまに携えていました。

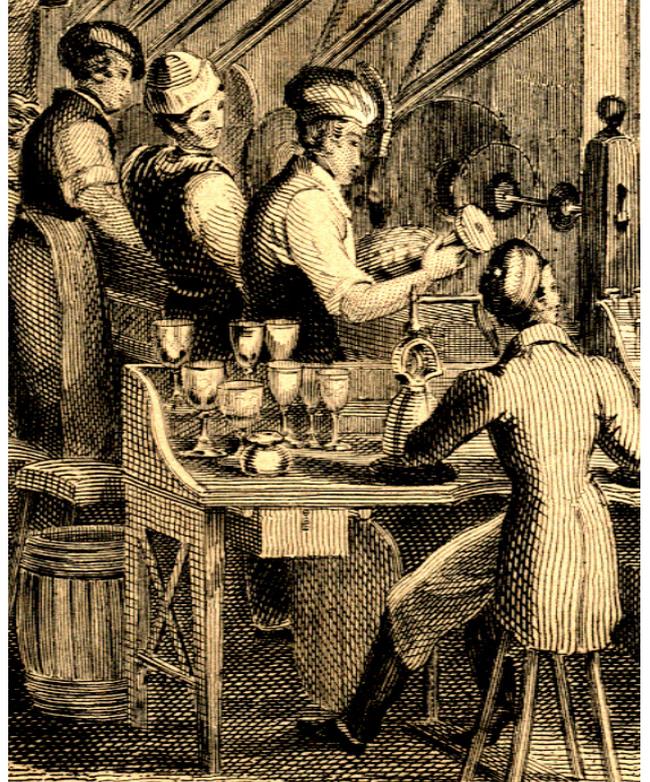


図6: 図5ガラス装飾工房の部分拡大図。工房内のホイール・エングレーヴィング職人は、カッティング職人10人に対してたった一人の割合である。エングレーヴィング職人は踏み板の装置を使い、足で旋盤を回す。エディンバラ市博物館及びギャラリー、エディンバラ博物館、エディンバラ博物館の私有貸主のご厚意により転載。

## 品川にて

前身である興業社が1873年に創業してから、英国の技術導入を受け、10年後に民营化するまでの間の品川硝子製造所の事業理念は変わらなかったのですが、主要となる製造品はその都度変化しました。創業当初はウォルトンが窯を築き、板ガラス製造を指導しました。スキッドモアはガラスを溶融するための坩堝の製造を指導しました。そして1876年に品川硝子製造所は官営化されましたが、その当時は一般家庭用の食器や瓶、日用品、街灯や船舶および汽車の照明器具用、理化学用ガラスといったものの製造を目指して技術指導が行われていました。<sup>17</sup> さらに板ガラス製造にも挑み続けましたが、この技術は西洋以外で導入するのが非常に難しいものでした。スピードが任期を開始した1879年、着色剤としてのさまざまな金属酸化物、型吹きや押し型に使う道具類が英国から輸入されており、ガラスの装飾技術を重視する段階に入ったことがわかります。

日本の記録によれば、1880年から1881年前半までのある時点で、ガラス装飾に必要な材料が英国から輸入されています。<sup>18</sup> 正確にいつ輸入されたのかはわかりませんが、先に述べたように切子はすでに定着しており、ホープトマンが着任する前からカッティング職人は品川の製造所で働いていました。<sup>19</sup> ホープトマンの到着直前に開催された内国勸業博覧会では、品川の製造所からカットガラス製品が出品されています。つまり、熱心な切子職人らが管理者に技術指導を懇願して、1881年5月のホープトマン来日前に、スピードがカッティングの指導を行っていた可能性もあるのです。<sup>20</sup>



図7:20世紀中頃、東京の堀口硝子のカッティング工房。一台の電動機で数台の旋盤を動かす。この装置と配置は原型の19世紀に設計された英国のカッティング工房ととてもよく似ている。堀口切子のご厚意により転載。

1880年から1883年の間、ここではどのような様子でガラス装飾が行われていたのでしょうか。推測するしかできませんが、英国から専用の回転器具が届く以前の日本でのカッティングは、棒状金具を使って手作業で研磨するという骨の折れる方法で細工されていたと考えられます。しかし、回転器具が届くやいなや、カッティングは手廻しに変わりました。おそらく見習い職人が手で車輪を回転し旋盤を作動したのでしょう。器具は枠組みに固定した水平軸と大型の車輪がベルトで連結され、カッティング用もしくは研磨用回転盤が軸に乗った仕組みでした。彫刻、研磨とそれぞれの用途に合った回転盤にガラスを当て加工します。ちなみに、ホイール・エングレーヴィング用に輸入された二つの旋盤は、足踏み式だったと思われます。

国交を再開したばかりの日本にとって蒸気機関は最新技術でした。1883年に民営化される以前の品川製造所で、高価な機械を購入することはまだ不可能だったのでしょうか。<sup>21</sup> しかし熟練した職人たちは経済的な余裕ができるやいなや、蒸気機関を導入します。19世紀の終わりには、日本でも英国式の蒸気機関を模倣したカッティング工場が見られるようになりました。ホープトマンに教えを受けた岩城瀧次郎の工房もそのひとつです。もし、1894年に英国人あるいはアイルランド人のカッティング職人が岩城の工房を訪れたとしたら、馴染みの蒸気で動く機械に囲まれて、異国とは思えない居心地の良さを感じたことでしょう。<sup>22</sup> 木製の深い桶が並び、動力を伝えるベルトで大型の旋盤が一台の回転軸に連結されたこの配置は、英国と日本の両国のカッティング工房で一般的な設計でした。これは20世紀半ばまで、動力が蒸気から電気に転換されても続きました。スコットランドのホリールド・フrint・グラス・ワークス(図5)と東京の堀口硝子(図7)のカッティング工房は、おそらく100年以上時代が離れたものですが、英国の産業技術が品川硝子製造所に与えた影響がどれほど強かったのかを表しているのです。

品川で始まったホイール・エングレーヴィング技法と、大型のカッティングホイールを用いた回転式のカット。この導入こそ、日本にとって西洋式ガラス装飾を会得するための重要な過程でした。これらの器具のおかげで、ホープトマン指導のもと、カッティングやエングレーヴィングを日本の職人らがより速く、より深く、より効率的に、より精緻に習得することができました。1883年に品川の硝子製造所が民営化されるまでにどれだけの伝習生がいたのか、正確には知られていませんが、1993年に山口勝旦が著書で明らかにしたところ、この製造所を経て東京で切子職人になったのは約20名で、そのほぼ全員が、一度は岩城硝子製造所(1883年岩城瀧次郎により創業)で働いていました。

## 現代の江戸切子

日本の工匠たちは師弟関係を非常に大切にしてきました。今日の切子職人のうち、ホープトマンから指導を受けた先祖を血縁にもつものもいます。例えば、大橋徳松(1873年～1951年)は、ホープトマン<sup>23</sup> に指導を受け、熟練職人になりました。その大橋に、小林菊一郎が弟子入りしています。その小林は、後に二つの系統を築きます。ひとつの系統は息子の小林英夫であり、もうひとつが血縁にあたる堀口市雄です。この小林家、堀口家はそれぞれ今日まで続く会社を東京で興しました。1917年小林硝子工芸所、1921年堀口硝子、そして2008年、堀口徹により堀口切子が創業されています。堀口市雄が初代秀石を号したのに始まり、二代目秀石が須田富雄、三代秀石が堀口徹、これが堀口の系統です。

江戸切子は現代も非常に盛んです。1985年、東京都の伝統工芸品に指定された後、2002年には国指定伝統的工芸品に認定されました。江戸切子とは、東京近郊の特定の区域で、主に回転道具を使用して手作業で作られたガラス製品を指す、と定義づけられています。江戸切子協同組合のウェブサイトには、現在51名の組合員が掲載され、サイトによると東京近郊に約100名の職人がいるとのこと。なお、切子は東京だけでなく、鹿児島や日本国内の別の場所でも作られています。



図8: 紫色のガラスを被せたクリスタルガラス。堀口市雄作。1937年。高さ303mm。矢来文。堀口切子のご厚意により転載。



図10: 無色のクリスタルガラス鉢。小林菊一郎作。1963年。直径220mm 高さ120mm。うろこ文。堀口切子のご厚意により転載。

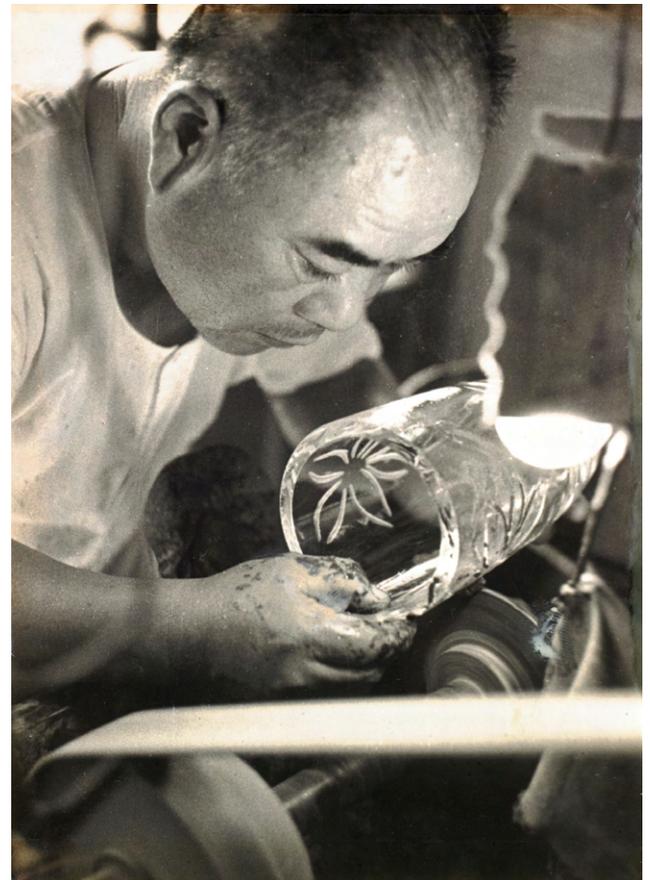


図9: 小林菊一郎の弟子で堀口硝子創業者、堀口市雄(1912年～1983年)。1960～70年代撮影。堀口切子のご厚意により転載。

## 結び

1882年10月、ホープトマンは家族が待つイングランドのゲーツヘッドへ帰郷し、1924年に亡くなるまで、そこでエングレーヴィング職人として働きました。品川硝子製造所は事業存続に成功不可欠だった板ガラスの製造に失敗したことが大きな要因となり、1883年、政府により閉鎖されました。大阪で初めて商品化が成功に至る1910年まで、板ガラス製造は技術導入があまりにも難しい事業でした。のちに品川硝子製造所は民営となり、ドイツの技術協力を受けて再開されますが、その時にはあの四人の英国人は皆、日本を去っていました。ウォルトンは1878年に帰国、スピードとスキッドモアは品川を去った後、しばらく日本の別の場所で働いてから英国に帰国しています。

日本ではこの四人はガラス製造分野の専門技師——達人——として記録されていますが、祖国で彼らはまったく普通の職人に過ぎませんでした。英国に帰国後、ガラス製造に関わる職ならどんな仕事でも請け合い、脚光を浴びた時間はもう終わってしまったと現実を受け入れなければなりません。日本の近代化政策に尽力した英国の達人たちの功績は、日本のガラス産業界では現在も語り継がれているものの、本国ではほとんど評価されていません。日本の公式の場で敬意を表されたこともありませんでした。それでもこの四人が、本国では稼げなかったであろう報酬を日本で存分に受け、素晴らしい経験をしたことは間違いありません。四人の自叙伝は残されていませんが、少なくともエマニュエル・ホープトマンは日本でやり遂げた任務を誇りに感じていたことでしょう。異国の地でガラス装飾の技工を伝授する、それはまさにボヘミアガラス職人の在り方であり、日本で過ごした時間は、故郷や親族が歩んできた志を継ぐ最高の機会だったのですから。

2021年4月



図11:特選盃 参拾客揃(とくせんさかかずき さんじゅっきやくざろえ)。2013年。堀口切子のご厚意により転載。



図12:江戸切子職人で江戸切子協同組合会員の堀口徹(1976～)。須田富雄に師事し三代秀石を継承する。堀口切子のご厚意により転載。



図13:オブジェ『sanagi』堀口徹作。2011年。ソーダ石灰ガラス。直径120mm 高さ162mm。堀口切子のご厚意により転載。

## 参考文献

- Haden, S., 2013. They went to larn 'em: British glassmakers help to establish Japan's first western-style glassworks, 1874-1883. Society of Glass Technology: European Journal of Glass Science and Technology A, February 2013, 54 (1), pp.25-30
- Haden, S., 2014. They went to larn 'em: How four British glassmakers played a key part in the modernisation of Japan's glass industry in the late 19th century. Journal of the Glass Association, Vol.10
- Haden, S., 2017. A British Glass Expert at Shinagawa Glass Works: James Speed, my Great Grandfather. Annual Report of Shinagawa Historical Museum
- Hajdamach, Charles R., 1991. British Glass 1800-1914, Antique Collectors Club
- Inoue, A., 2003. 'British Influence on the Shinagawa Glassworks – Japan's First Industrial Glass Factory.' Annales of the 16th Congress, AIHV, London
- 井上曉子『「品川硝子」について』日本ガラス工芸学会学会誌「GLASS」6号/7号、日本ガラス工芸学会誌、1979年
- Irvine, D. and Haden, S., 2019. 'Emanuel Hauptmann: Itinerant Glass Engraver', Glass Matters, Journal of The Glass Society, Vol.4
- 『行政文書:工部省明治十三年七月～明治十四年六月第六回報告下』(オンライン文献)国立公文書館、東京
- Polak, Ada,. 1975 Glass, Its Makers and Its Public, Weidenfeld & Nicholson
- 杉江重誠『日本ガラス工業史』日本ガラス工業史編集委員会、1950年
- Turnbull, J., 2017. From Goblets to Gaslights: The Scottish Glass Industry 1750-2006, Society of Antiquaries of Scotland, Edinburgh, Scotland
- 山口勝旦『江戸切子:その流れを支えた人と技』里文出版、初版1993年/新装版2009年
- 吉岡律夫『品川硝子製造所の歴史』(オンライン文献)、アクセス日2021年3月22日

---

## 謝辞

論文の研究にあたり、ご支援とご協力いただきました方々にここでお礼を申し上げます。

はじめに、エマニュエル・ホープトマン氏のご子孫のみなさま、特に彼の玄孫であられるダイアン・アーヴィン氏とご一緒する好機に恵まれ、とても感謝しております。ご家族が情報をくまなく収集し、私と共有して頂いたのちに彼女が独自の調査を行ってくださったことで、エマニュエル氏への理解がとても深まりました。

品川硝子製造所が日本のガラス製造、そして江戸切子にもたらした歴史的な重要性を明らかにした井上曉子氏に深く感謝申し上げます。井上氏のおかげで私にとって初めての、そして唯一の、私の先祖ジェームズ・スピードの写真を手に入れることができました。ジェームズはエマニュエル氏の同輩で、品川で技師を務めました。

江戸切子職人堀口徹氏とご一緒できたことは大変光栄でした。2016年に共同研究を始めて以来、堀口氏からは幾度も励ましていただきました。さらに、日本ウランガラス同好会事務局の吉岡律夫氏へも感謝申し上げます。吉岡氏のガラス製造に対する関心と、さまざまな質問に答えてくださる意欲は、とても貴重なものとなりました。

最後に、ガラス歴史研究家のジル・ターンブル氏に御礼申し上げます。スコットランドのガラス製造に関して深くご説明いただき、また、研究旅行でエディンバラを訪問した際ダイアン氏と私に親切にいただき、ありがとうございました。

## 著者について

サリー・ヘイデンはヴィクトリア時代と日本のガラス製造を専門とする歴史ライターおよび研究者。ジェームズ・スピードの曾孫にあたる。サリーと兄ドナルド・ヘイデンが2005年に先祖の家業の歴史を調べることからガラス製造の歴史に関心を持つ。共著作に『A Bumpy Ride: One Hundred and Fifty Years of Haden Manufacturing in the West Midlands』(2015年, アスペクトデザイン出版)がある。英国のガラス協会にいくつか論文を執筆し、また、さまざまな国での出版を目的として、日本国内外の専門家とともに研究と執筆を行っている。著者詳細はこちらのウェブサイトから。 [www.WhoMadeThatGlass.com](http://www.WhoMadeThatGlass.com)

---

## 注釈

1. “Emanuel” や “Hauptmann” と表記する際、綴り方は複数ありますが、エマニュエル・ホープトマンは当時、ドイツ語が主流だった国に生まれているため、“m” が一つだけの “Emanuel”、“n” が二つ続く “Hauptmann” というドイツ語由来の綴りにしています。なお、ボヘミアの出生記録やホープトマンの親族が保有するエングレーヴィング作品に記された署名からも、この綴り表記が確認されています。
2. 杉江 前掲書xx頁
3. ジェームズ・スピードは著者の曾祖父にあたります。
4. 西洋と日本のガラス研究者間で議論的になっています。詳しくはこちらで述べられています(ドイツ語/英語)。 <https://www.press-glas-korrespondenz.de/aktuelles/pdf/pk-2016-2w-yoshioka-japan-glasindustrie-1890.pdf>
5. 現在のチェコ共和国、南ボヘミア地方にあるホルニー・ストロブニツェにあたります。
6. 現在のチェコ共和国、チェスカリパ地区にあるヴォルフアルティツェにあたります。
7. 現在のチェコ共和国、カメニツキー・シェノフとノヴィー・ボルにあたります。
8. アダ・ポラック 前掲書193頁
9. アダ・ポラック 前掲書107頁
10. ボヘミア出身のホイール・エングレーヴィング職人であるJHBミラーも、ボヘミアからの職人受け入れルートとなっていました。イグナツより10年遅れてエディンバラに到着しているミラーですが、1860年代までにホープトマン社と同等の規模でビジネスを行っていました。
11. アダ・ポラック 前掲書107頁
12. 成形しただけのガラス製品は「ブランク(blanks:空白の意)」と呼ばれていました。これに職人が装飾作業を加えます。
13. Turnbull, J 前掲書37頁 歴史を遡るとエディンバラのガラス工場は数々の名称がありました。1819年、ウィリアム・フォードの死後まもなくこの工場はジョン・フォードとウィリアム・ベイリーの共同事業でミッドロージアン・グラス・ワークスと名付けられました。1835年ジョン・フォードが単独所有すると、1904年の閉鎖まで、一般的にホリールド・フロント・グラス・ワークスの名で知られていました。
14. エディンバラ及びリース郵便局住所録1853-1854商工人名録
15. 倒産企業資料1881年5月18日 スコットランド国立登記 CS318\_25\_234\_1 p.1C
16. ボヘミア国籍のエマニュエル・ホープトマンは英国女性と結婚し、英国民となりました。
17. 製造所の歴史の概要は <http://uranglass.gooside.com/shinagawa/sgf.htm> を参照してください。
18. エングレーヴィング用旋盤二台、石製および木製ホイール数十個。刷毛ホイール、コルク、研磨砂、ノーシンク鉄。国立公文書館「行政文書:工部省明治十三年七月~明治十四年六月第六回報告下」  
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/M0000000000000038551> (アクセス日2021年2月26日)
19. 大重仲左衛門はもともと薩摩切子の職人で、1878年に品川硝子製造所に入所しています。そのため、エマニュエル・ホープトマンの指導を受け、たちまち上達し、1883年に製造所が閉鎖する前には、マイスター(師匠)となっています。
20. 山口勝旦、前掲書2009年
21. 山口勝旦 前掲書2009年187-189頁
22. 大橋の生年月日は、山口が1993年に明らかにしており、正確だと思われます。当時は、英国でも日本でも幼い頃から修行するのが通例でした。
23. 江戸切子協同組合 組合員紹介 <https://www.edokiriko.or.jp/kumiai.html> (アクセス日2021年2月26日)